The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	アメリカ在住イラン人ディアスポラの集団形成 : 場とアイデンティティ概念の再検討
Author(s)	椿原, 敦子
Citation	大阪大学, 2014, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/34007
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

様式３

論　文　内　容　の　要　旨

〔　題　　名　〕

アメリカ在住イラン人ディアスポラの集団形成：場とアイデンティティ概念の再検討

学位申請者　　椿原　敦子

本学位申請論文は、アメリカ合衆国・カリフォルニア州ロサンゼルス郡を中心とする広域ロサンゼルス地域をフィールドとして、イランからの移住者の集団形成の動態を、都市空間への表れから検討することを目的とする。本論文は5章から構成され、加えて序章と終章がある。

序章では、これまでの国境を越える移民・移住の人類学的研究を検討し、その問題関心がナショナリズムやグローバリゼーションなど、近代からポスト近代に至る統治の企ての帰結に置かれており、集団形成やアイデンティティはその指標として用いられていた点を指摘した。また、これまでの研究手法が既存の集団のネットワークを強調する故に、集団形成の動態そのものが十分に解明されていないことを指摘した。以上の問題から、人々の都市での日常的実践を、地理的な場（サイト）での展開に即して仔細に検討する必要があることを主張した。

第１章では、調査地の概要として1979年のイラン革命以降に急増したイラン人のロサンゼルスへの移住の波を明らかにした。最初に、米国政府による統計に、「イラン人」がどのように計上されていたかを検討した。その上で、イランとアメリカの外交関係が入国者数の推移や法的地位とどのように関わっていたかを論じた。次に、本国での生活状況、移住の動機、アメリカ入国やロサンゼルスへの定住過程のパターンを分析することで、ロサンゼルスのイラン人の多様性を論じた。

第2章では、イラン系ムスリムの宗教実践の場における、ムスリム・アイデンティティと規範の関係を検討した。第1節では女性の服装規定を、第2節ではイスラーム暦ムハッラム月に行われる宗教儀礼を考察し、革命以降のイラン本国での実践との異化が見られることが明らかになった。革命以後のイランでの宗教実践が「規範を遵守することがムスリムである」という構成的規則に基き、実践の多様性を狭めていったのに対し、観察からはムスリム・アイデンティティは実践に先立つものとして認められ、「善きムスリムであるための規範」という規制的規則が実践を導いていた。こうした異化の結果としてロサンゼルスでの宗教実践はアメリカ的な個人主義の様相を呈し、一つの場所で異なる実践形式が同時に展開されることを指摘した。

第3章では、イラン系ユダヤ人の宗教実践の場を扱い、ヨーロッパ出身のアシュケナジー系ユダヤ人との関係から集団としての離合集散を明らかにした。第１節では啓蒙期以降のヨーロッパのユダヤ人と、国民国家成立以降のイランのユダヤ人が辿った歴史を比較した。第2節では、ロサンゼルスにおけるイラン系ユダヤ人の宗教実践が、アシュケナジー系との接触により変容したことを明らかにした。本章を通じて、ロサンゼルスのイラン系ユダヤ人の間で民族集団としての「ユダヤ人」アイデンティティは経済活動や家族生活の場での「イラン人」アイデンティティと統合され、宗教集団としての「ユダヤ教徒」アイデンティティはアシュケナジー系と同じ教義や実践を行う「アメリカ人」アイデンティティと統合されたと結論付けた。

第4章では、ビバリーヒルズ市おける新規建造物をめぐる景観のコンフリクトを扱い、規制する行政側とされる側の建築者の立場にあるイラン人たちのやりとりを分析した。第1節でビバリーヒルズ市における景観保護規制の概要を示した。第2節では行政による家屋デザイン計画の審査の中で、行政側と建築者の討議が進められる過程を検討した。行政の視点は全体・眺望・正しさへ、建築者側の視点は部分・凝視・美しさへと向けられていた。討議が重ねられた結果として、それぞれの景観を見る眼が共有され、両者の価値基準が相互に理解されることによりコンフリクトが調停されたことを明らかにした。

第5章では、ウエストウッド地区の一角がロサンゼルス市の公称として「ペルシア・スクエア」と命名されるまでのプロセスを扱い、場所の表象と日常的な経験の「ずれ」、そして両者の統合の過程を明らかにした。第1節では、ダウンタウンとウエストウッドというふたつの場所におけるイラン人たちの不可視性を論じた。ふたつの場所に共通するのは、イラン人たちが空間に自分たちを刻印することよりも、その徴を消す「白人化」に関心を持っていた点である。こうした相似にもかかわらず、ウエストウッドは新しく創造された祝祭を通じて、イラン人にとってのシンボリックな場所となっていったことを第2節で検討した。

終章では、ロサンゼルスのイラン人たちの居住・生産・消費活動の場、宗教実践や社交の場は地理的に大きく隔たり、人々はそれぞれの場で異なる振る舞いをして、異なるアイデンティティを付与されていると指摘した。そして、「イラン人」「イスラーム・ユダヤ教徒」「アメリカ人・白人」といったカテゴリーの、それぞれの場での整序がアイデンティティを形成し、集団を編成したと結論付けた。

様式 7

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏　名　（　椿原　敦子　）			
論文審査担当者	（職）		氏　名
	主 査	教　授	中川　敏
	副 査	教　授	栗本　英世
	副 査	准教授	森田　敦郎

論文審査の結果の要旨

本研究は、アメリカ、ロサンゼルスに移住してきたイラン人を対象にして、彼らが「わたしたち」という集団の境界をいかに策定しているのかを探る研究である。

在米イラン人は、さまざまな機会にさまざまな理由で移住してきた人たちである。彼らの宗教はさまざまである。ムスリムもいれば、ユダヤ教徒もいる。経済的階層もさまざまである。政治的な信条から見ても、左翼もいれば王党派もいる。そして、在米イラン人たちは、他の移住者、たとえばベトナム人や中国人のようにエスニックエンクレーブ（集住地域）をつくらない。

一言で言えば、在米イラン人はバラバラである。すくなくとも外部からの観察者にはそう見える。そのような在米イラン人が、ロサンゼルスに「ペルシャ・スクエア」と呼ばれる区画を作り上げるまでの物語、それがこの論考である。

序章と1章で理論的な設定、民族誌的な設定をした上で、著者は、2章から各論にはいる。2章はムスリム、3章はユダヤ人について分析される。イラン人ムスリムたちは、アメリカのメインストリームの人達のもつ敵意に満ちた「イラン人ムスリム」観の中で、そのステレオタイプとは違ったあたらしい「イラン人ムスリム」を作りあげていく。その戦略を、著者は、サールの構成的規則と規制的規則の理論的道具立てを用いながら、分析する。3章の「ユダヤ人」で焦点があてられるのは、さきにアメリカに来たユダヤ人たち（アシュケナージュ）との対立である。アシュケナージュの歴史を繙きながら、著者は、その歴史の中に（国家による）聖と俗の分離があることを指摘する。イラン系のユダヤ人にそのような区別はない。在米アメリカのイラン系ユダヤ人がどのようにして聖と俗の分離を体得していくのかを、著者は詳細な民族誌を用いて描写していく。

2章、3章で浮き彫りにされるのは「アメリカ市民であること」と「イラン系であること」の対立である。その対立が簡単には止揚できないものであることを描くのが4章の「ペルシャ・パレス」であり、そのような困難にもかかわらず、それを止揚していくイラン人たちの努力を描くのが5章の「ペルシャ・スクエア」である。

著者は、大都市に住み、集住しない人々という、フィールドワークをするのに非常に困難な状況の中で、信じられない程の豊富な民族誌的な情報を集めている。そしてその豊富な情報に基づいて緻密な理論的な議論を積み重ねている。そして、在米イラン人たちの集団形成の戦略を見事に描き出すことに成功している。

本論文は博士（人間科学）の学位論文として十分価値あるものと認められる。